巻頭エッセイ

言葉と向き合う

言葉とは人そのもの

プロレスラー　棚橋弘至（新日本プロレス）

良くハキハキと話す人は、明るい印象を周りに与えているのではないでしょうか？そう。発せられた「言葉」で、周りの人は意識的に、または無意識のうちに人間を判断し、自分にとってどういう存在なのかをふるいにかけているのです。

僕が「言葉」に興味を持ち始めたのは高校生のときでした。現国のテストの点数が伸びなかった僕は、先生に相談し本を読むことを勧められました。基本的に運動ばかりしていた僕は、読書の習慣がなかったのです。果たして何から読めばいいのか、と書店に入り、最初に手に取ったのは赤川次郎先生の三毛猫ホームズシリーズの一冊でした。「勉強のため」と思い読み始めたのですが、いつのまにかストーリーに引き込まれ3時間くらいで読み終えていました。

それから僕は読書にハマりました。西村京太郎先生、内田康夫先生など全国あちこちで起こる事件に、岐阜県からほとんど出たことのなかった僕はエア旅行を楽しみました。大学生になり、東野圭吾先生や宮部みゆき先生の作品はほぼ読破しました。京極夏彦先生の作品は…分厚過ぎて…とはいえ何冊かは読みました（笑）。

さて、こうして読書の習慣が身についた僕は、少しずつではありますが言葉の大切さを理解し始め、さらにそれを痛感したのはプロレスラーになってからでした。

プロレスラーになって、リング上で頑張って闘ってさえいれば、順番にトップレスラーになれるのではないかと考えていました。しかし、新日本プロレス入門直後から徐々にプロレスの人気が下火になり、お客さんも減っていってしまったのです。ショックでした。マジかよ！と思いました。入門テストを3回目でなんとか突破。これで厳しい練習を耐え抜けさえすれば、スターに！トップレスラーになれるんじゃないのかよ！と思っていたからです。しかし、待っていても事態は好転しませんでした。

そこで、２００６年、新日本プロレスのＩＷＧＰヘビー級チャンピオンになった僕は、積極的に大会のプロモーション活動を始めました。「プロレスを観たことがない人に、プロレスをアピールして会場に来てもらおう」と考えたのです。ですが、なかなか思惑通りには行きませんでした。「プロレス」という言葉の印象が良くなかったからです。プロレスという四文字が持っていた印象は「暴力的、野蛮、怖そう、痛そう」というマイナスなものばっかりだったからです。プロモーションで訪れた先の方が女性だと、その拒絶反応はさらに顕著でした。

こうして、マイナスからのスタートを切った僕のプロレス普及活動でしたが、突破口を開いたのは「言葉」でした。プロレスラーでありながら、プロレスラーらしくない外見に、優しく物腰の柔らかい対応力が僕にはありました（笑）。プロレスが従来持っていた「怖い、痛そう」というイメージを変えるためには、印象操作が必要でした。「怖い、痛そう」を「迫力がある、面白そう」に変えていく作業を、その対応力を活かしてコツコツと水面下で進めました。試合前や試合後のコメントにも気を配りました。「頑張ります！」や「絶対、勝ちます！」などの言葉ではプロレスに興味がある人にしか届かないからです。

ここで役に立ったのは、僕が高校生のときからずっと無意識下に溜め込んでいた語彙量でした。プロレスに興味がない方に届く言葉を選んで使うようにしたのです。仮面ライダーが好きだったこともあり、仮面ライダーのキャッチコピーや名言をそのまま使うこともありました。これでライダーファンには届く可能性が出てきます。それに加えて気をつけたのは、思ったことを、そのまま口に出すということでした。人を好きになるのも、嫌いになるのも言葉からだと考えたからです。

「外見とはただの器で、中身を埋めるのは言葉。言葉とは人そのものである」という真理にたどり着いてしまったからです。

冒頭でも言いましたが「どんな言葉を使うか？」で人生が決まっていきます。自分から発せられた言葉は自分そのもの。まさに分身だからです。その事に気づくのは、若ければ若いほどいいと思います。

最後に僕が自ら考えた自分のキャッチコピーを紹介します。

「100年に一人の逸材」

何度でも言いましょう。言葉とは、その人自身でもあり、生き方を人に伝えるものなのです。

「どんな言葉を使うか？」で、生き方が決まります。大げさに聞こえるかも知れませんが、経験上、ほぼ間違いないです。近い将来、どこかの偉い人がそれを証明する説を唱えてくれるかもしれません。

自分の周りの人を思い出してみてください。丁寧な言葉を使う人は丁寧な性格で丁寧な人生を送っているし、乱暴な物言いの人は、なにかと人と衝突しているし、元気な人に、プロレスをアピールして会場に来てもらおう」と考えたのです。ですが、なかなか思惑通りには行きませんでした。「プロレス」という言葉の印象が良くなかったからです。プロレスという四文字が持っていた印象は「暴力的、野蛮、怖そう、痛そう」というマイナスなものばっかりだったからです。プロモーションで訪れた先の方が女性だと、その拒絶反応はさらに顕著でした。

こうして、マイナスからのスタートを切った僕のプロレス普及活動でしたが、突破口を開いたのは「言葉」でした。プロレスラーでありながら、プロレスラーらしくない外見に、優しく物腰の柔らかい対応力が僕にはありました（笑）。プロレスが従来持っていた「怖い、痛そう」というイメージを変えるためには、印象操作が必要でした。「怖い、痛そう」を「迫力がある、面白そう」に変えていく作業を、その対応力を活かしてコツコツと水面下で進めました。試合前や試合後のコメントにも気を配りました。「頑張ります！」や「絶対、勝ちます！」などの言葉ではプロレスに興味がある人にしか届かないからです。

ここで役に立ったのは、僕が高校生のときからずっと無意識下に溜め込んでいた語彙量でした。プロレスに興味がない方に届く言葉を選んで使うようにしたのです。仮面ライダーが好きだったこともあり、仮面ライダーのキャッチコピーや名言をそのまま使うこともありました。これでライダーファンには届く可能性が出てきます。それに加えて気をつけたのは、思ったことを、そのまま口に出すということでした。人を好きになるのも、嫌いになるのも言葉からだと考えたからです。

「外見とはただの器で、中身を埋めるのは言葉。言葉とは人そのものである」という真理にたどり着いてしまったからです。

冒頭でも言いましたが「どんな言葉を使うか？」で人生が決まっていきます。自分から発せられた言葉は自分そのもの。まさに分身だからです。その事に気づくのは、若ければ若いほどいいと思います。

最後に僕が自ら考えた自分のキャッチコピーを紹介します。

「100年に一人の逸材」

何度でも言いましょう。言葉とは、その人自身でもあり、生き方を人に伝えるものなのです。

棚橋弘至（たなはしひろし）

1976年岐阜県生まれ。立命館大学法学部卒業。大学時代にプロレスラーを志し，在学中に入門テストに合格。日本人離れした肉体で，団体最高峰のベルト，IWGPヘビー級王座に何度も君臨。近年はテレビ出演や執筆活動など，リング外での活動も精力的に行い，プロレスブームをけん引する。著書に『棚橋弘至はなぜ新日本プロレスを変えることができたのか』(飛鳥新社)，『カウント2.9から立ち上がれ 逆境からの「復活力」』(マガジンハウス)などがある。

©新日本プロレス